

東京女子高等專門學校教授 田中健三 著

問題解説

京都
專門學
女子高
校教授
等

田中健三著

(國文學
講座)

問題 解說

全

株式會社
平凡社
內

受験講座刊行會

昭和五年十一月十日印刷
昭和五年十一月十五日發行

第十回三冊の内

(非賣品)

國文學講座

全十二冊の内

問題解説

編輯者兼
發行者

受驗講座刊行會

右代表者

加藤雄策

印刷者

濤川薰

東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麹町區下六番町一〇
株式會社平凡社内

受驗講座刊行會

振替口座東京二九六三九番

問題解説

目次

文法に關する解説	一
説問の解説	二五
文法に關する解説	六〇
源氏物語より出でたる問題の解説	七〇
枕草子より出でたる問題の解説	一〇四
増鏡より出でたる問題の解説	一二九
徒然草及び十訓抄問題の解説	一六二
設問の解説	一七四

文法に關する解説

文法殊に文章法の解説は、數學の解き方によく似てゐる。解き得た結果その物はあまり價值が無い。結果に到達する道程が最も大切である。此の道程をば自分で考へ得る資料として、茲に問題の見方から入り、解説を爲して、言ひ足らぬところは備考として附け加へることにする。

【問題】

左ノ歌ニツキテ文ノ構成ヲ説明シ歌中ニ於ケル用言ニツキテ文語口語兩様ノ活用表ヲ作レ（昭和二年

十月豫備）

かたちこそみ山がくれのくちなれ

心は花になさばなりなむ

【問題の見方】

用言即ち動詞形容詞助動詞を考へて右に黒點を附ける。用言は述語になるもので、文中最も大切な

職能を有するからである。「なれ」は助動詞だから、上の名詞「くちき」に附随して述語となる。「くちきなれ」といふ述語の主語を考へる。「かたち」が主語である。次に「なさ」といふ述語について考へる。終止形「なす」といふ他動詞は複對他動詞（大槻博士廣日本典六七頁参照）で、何が何ヲ何ニといふ三つの關係事物を要する。即ち主語と二つの客語とを要する。主語は何か、茲の考察が最も大切である。心を主語とすると誤だ。主語は省略されて歌に表れてゐない。「心をば」の「を」を省いて「心は」となつた、随つて心は客語で主語でない。「我れ心をば花になす」と歸結すべきである。次に「なりなむ」を述語とする。「なり」の終止形「なる」は有對自動詞で、何が何ニと、主語と客語とを要する。「心は花になりなむ」と語を補へば良い。

【解説】

かたちこそ	主語	み山がくれの	形修語	くちきなれ	述語	附屬句
我れ	主語	心をば	客語	花に	客語	なさは
心は	主語	花に	客語	なりなむ	述語	複文
原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
である	であら	であつ	である	である	○	○
					口語 同	文語助動詞

だ	だら	だつ	だ	だ	○	○	口語 同
です	でせ	でし	です	です	○	○	口語 同
なす	なさ	なし	なす	なす	なせ	なせ	文語口語動詞
なる	なら	なり	なる	なる	なれ	なれ	文語口語 同
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ	文語 助動詞
た	たら	て	た	た	たれ	○	口語 同
む	○	○	む	む	め	○	文語 同
う	○	○	う	○	○	○	口語 同
よう	○	○	よう	○	○	○	口語 同

【備考】 一、客語補語は區別し難き場合もあるので、二者を合せて客語と總稱した。表中右に黑點のある語形は本文の活用形を示す。指定口語助動詞「だ・です」は對話に、「である」は筆記又は説明體の文につかはれる。これ等の連體形「だもの」「だこと」「ですこと」「ですもの」等は用法比較的少い。又文語「なり」から出來た語で、口語の「なら」「な」「なれ」未然・連體・已然の三つの形がある。

【備考】 二、豫備試験には品詞、本試験には文章法と、以前は大體略ぼ定まつてゐたが、大正十二年度から、文の構造と用言の活用とを説明する問題にかはつた。これは問題の一進歩である。元來品詞だの文章法だのとわけるの

は、便宜上の事で相互密接の關係がある。たゞ品詞は形體を主とし、文章法は意義を主とする迄で、常に相俟つて考へなくてはならぬ。

【問題】

(昭和二年十月豫備)

ひさかたの月の桂も折るばかり

家の風をも吹かせてし・がな

【見方】

用言を考へて右に黒點をつける。「折る」「吹かす」の主語を考へる。すると

汝・主

久方の月の桂をも折るばかり

汝・主

家の風をも吹かせてし・がな

共同主語であるから、前の句をば修飾連語として取扱ふ。

【解説】

形修語

久方の(月にかゝる) 月の桂も祈るばかり

副修連語

主語

汝(省略、歌に表れない)

形修語 客語

家の風をも

客部

述語

吹かせてし・がな

單文

【備考】 句とは主語と述語とが結合してゐるが、更に大なる文の一部をなすもので、連語とは主述結合關係のないものをいふ。連語を句といひ、句を節と稱せる學者もあるから、念の爲に定義して置く。

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令	
折る	をら	をり	をる	をる	をれ	をれ	文語口語動詞
吹く	ふか	ふき	ふく	ふく	ふけ	ふけ	語文口語同
す	せ	せ	す	する	すれ	せ(よ)	文語 助動詞
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せ(ろよ)	口語 同
つ	て	て	つ	つる	つれ	て(よ)	文語 同
た	たら	て	た	た	たれ	○	口語 同
き	○	○	き	し	しか	○	文語 同

【備考】 「き」の口語「た」の活用は、つの口語「た」の活用に同じい。「てしがな」は未來を豫て過去に言ひ做して願ふなり（廣日本文典二二〇頁參照）

【問題】 左ノ文章ニツキテ文ノ成分ヲ説明シ且文中ノ用言ヲ拔出シテソノ活用表ヲ作レ（大正十四年五月豫備）

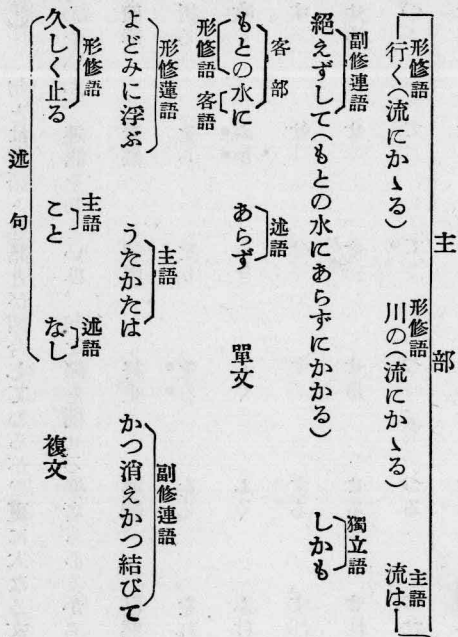
行く川の流は絶えずしてしかもとの水にあらすよどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しく止るこ

となし。

【見方】

用言の右に黒點をつける。「行く」は「流」の形修ゆゑ述語にならぬ。「浮ぶ」も同様。「久しく」は原形容詞だが、こゝでは副詞となつてゐる。故に用言拔出の際に省いてよろしい。此の外の用言は述語となるべき性質のものである。しかし「絶えず」と「あらず」とは、主語「流れ」を共同にもち、「消え」「結び」は「久しく止ることなし」といふ述句と主語「うたかた」を共同にもつてゐる。そこで上の方の述語をいづれも副修として取扱ふ。

【解説】



【問題】

左の文を文章法上より解剖せよ (大正十三年本試験)

やうやう天の下にもあちきなう人のもて悩みぐさになりていとはしたなき事多かれど忝なき御心ばへの類な

【備考】「絶えずして」の「して」は原佐三段(變格ともいふ)活用連用形に現在完了「つ」の連用形が重なり出來たのだが、慣用久しくて一の助詞と見做す(廣日本文典二〇七頁参照)

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令	種類	品詞
行く	ゆか	ゆき	ゆく	ゆく	ゆけ	ゆけ	四段	動詞
絶ゆ	たえ	たえ	たゆ	たゆる	たゆれ	たえ(よ)	下二	動詞
ず	ず	ず	ず	ぬ	ぬ	〇		助動詞
あり	あら	あり	あり	ある	あれ	あれ	良變	動詞
浮ぶ	浮ば	浮び	浮ぶ	浮ぶ	浮べ	浮べ	四段	動詞
消ゆ	きえ	きえ	きゆ	きゆる	きゆれ	きえ(よ)	下二	動詞
結ぶ	結ば	結び	結ぶ	結ぶ	結べ	結べ	四段	動詞
止る	止ら	止り	止る	止る	止れ	止れ	四段	動詞
なし	なく	なく	なし	なき	なけれ	〇	第一種	形容詞

きを頼にて交らひたまふ

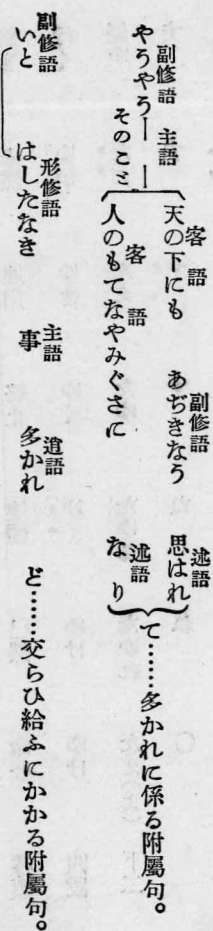
【見方】

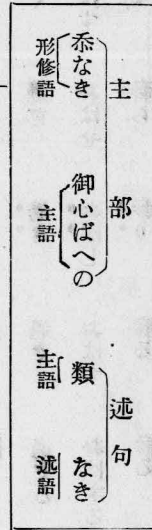
略せられた語について考へる。古文はこれが大切だ。「あぢきなう」は下の「なりて」へかけて文意を考へると、意味がうまく通らぬ。「主語(その事—更衣を愛し給ふこと)がやう／＼天の下にもあぢきなうなつて」これでは意味上都合がわるい。この考方が主眼點である。

そのことやうやう天の下にもあぢきなう思はれ

と語を補ふ。次に「頼にて」を「頼にし奉りて」と補ふ。此の文の歸結は「桐壺更衣交らひたまふ」である。此の上に接續助詞「て」「ど」「て」の三つある中、上の「なりて」の「て」は「多かれ」にかかる所謂陪臣の格であるから。「ど」と下の「て」から別々に直接「交らひたまふ」にかゝる。一は條件の逆態を示す「ど」、一は理由即ち順態を示す「て」である。

【解説】





を
頼に
—奉りて、

客語
述語

主語
彼
述語
交らひ給ふ

「客句……句で述語「し」の客語となるもの、主語は彼で、交らひ給ふと共同に所有す。

【問題】 現代文(文語體)の文法と中古文の文法との相違せる主要點を擧げよ (大正十四年本試験)

【見方】 文法上許容せる事項を説明せよといふ題を、裏から問うたのである。そこへ考がつくと何でもない易い題であるが、うつかり考へつかないで、しかも試験場で作るとなると相當な難問題であらう。中古文法「めり」が盛に用ひられたことや、「だに」の意義が擴張して「すら」の領域までも占領したことや、なを禁止の助詞が用ひられ、やか疑問助詞が係詞として用ひられたこと等が現代文と相違はしてゐるものの、主要な文法といふことは疑はしい。やつぱり十六箇條——動詞一、形容詞一、助動詞六、助詞七、その外一つ——の許容例で説明すべきことと思ふ。解説は誰でも出来るから省略する。

【問題】 左の文章中の主語とそれに對する述語とを指示し次に動詞を拔出してその活用表をつくれ (大正十

四年豫備)

年頃思ひつること果し侍りぬ聞きしも過ぎて尊くこそおはしつれそも参りたる人毎に山へのぼりしは何事かありけむゆかしかりしかど神へ参るこそ本意なれと思ひて山までは見ず

【見方】 文章中の主語を指示するのだから、省略された主語は指示するに及ばぬ。文章中の述語とそれに對する主

語とを指示せよといふ問題ならば省略の主語をも舉げねばならぬ。主語を見るには體言を捜せばよい。しかし動詞に右傍へ黑點をつけて、それから考へた方が脱落しなくて安全である。

【解説】 人毎に(主語)のぼる(述語) 何事か(主語) ありけむ(述語) 「われ(省略を補ふ)神へ参るこそ」、句で主語となる、即ち主句。それに對する述語は本意なれである。他は皆省略されてゐる。

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令	種類
思ふ	思は	思ひ	思ふ	思ふ	思へ	思へ	四段
果す	果さ	果し	果す	果す	果せ	果せ	四段
聞く	聞か	聞き	聞く	聞く	聞け	聞け	四段
過ぐ	過ぎ	過ぎ	過ぐ	過ぐる	過ぐれ	過ぎ(よ)	上二段
おはす	おはせ	おはし	おはす	おはする	おはすれ	おはせ(よ)	サ行三段
参る	参ら	参り	参る	参る	参れ	参れ	四段

登る	登ら	登り	登る	登る	登れ	登れ	四段
あり	あら	あり	あり	ある	あれ	あれ	良變
ゆかし	ーら	ーり	ーり	ーる	ーれ	ーれ	形容動詞
かり							
参る	参ら	参り	参る	参る	参れ	参れ	四段
思ふ	思は	思ひ	思ふ	思ふ	思へ	思へ	四段
見る	み	み	見る	見る	見れ	見(よ)	上一段

【備考】「おはす」を佐行變格に定めたのは本居春庭で、その後義門は之に疑を抱きて、四段と下二段と二語あることを證明した。詳しく廣日本文典別記五十二頁にも説かれてある。その「おはすトイフ動詞ノ活用ハ佐行ノ變格ナリトイフコト、國語家ノ間ノ一定ノ論ニテモアリ云々」と大槻博士が言はれて居ますが、どうも根據が薄弱と思はれるから、私個人の意見としては義門の説に従ひ、四段と見たい。

【問題】 左の文中の動詞形容詞助動詞を抽出して其の活き方を法(段・形)に當てて示せ (大正十三年豫備)

若し道のほとりに辱くも鳳輦を先立て、御旗をあげられ臨幸の嚴重なる事も侍らむに参りあへらばその時の進退いかが侍るべからむ

【見方】 動詞だけ纏めて先きに抽出し、次に形容詞次に助動詞と順次に拔出せばよい。文法書には法とも又段とも

形とも色々いつて、あるから括弧をして示したまでだ。動詞は自他をよく考へて活用を間違へぬやうにせねばならぬ。

【解説】

原形	未然	連用	終止	連體	已然	命令
先立つ	て	て	つ	つる	つれ	て(よ)
あぐ	げ	げ	ぐ	ぐる	ぐれ	げ(よ)
侍り	ら	り	り	る	れ	れ
参る	ら	り	る	る	れ	れ
あふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
嚴重なり	ら	り	る	る	れ	れ
らる	れ	れ	る	る	るれ	れ(よ)
む	○	○	む	む	め	○
り	ら	り	り	る	れ	れ
べかり	ら	り	り	る	れ	○

以上動詞
形容動詞

【備考】「辱く」は原形容詞であるが、こゝでは副詞と見る。

【問題】

左の文を文章法上より解剖せよ（大正十三年本試験）

昔は五たび譲りしあとをたづねて天日嗣の位にそなはり今は八隅知る名をのがれて藐姑射の山にすみかをしめたり

【見方】

昔はそなはり、今は占めたり。「昔は」「今は」主語で無くて副詞的修飾語であるから、主語を考へて補ふ事が最も大切な考へ方である。「我れ」とでも申上げて置く。これは共同の主語である。

【解説】

主語	副修語	主語（補足す）	副修語	述語	客語	述語	客語	述語	客語
我れ	昔は	古の帝の	五たび	譲りし	あと	を	たづねて	天日嗣の	すみかを
客語									
位に	そなはり	今	八隅知る	名を	のがれて		藐姑射の山に		
	述語	副修	形修語	客語	述語		客語		客語

しめたり
述語
複文

古の帝の五たび譲りし……形修句「あと」といふ客文に係る。

【備考】

主語を「彼の帝」としてもよいやうだが、さうすると述語に敬語が無くては不都合だ。敬語の無いところから見ると、御自分の事を宣はれた文と見える。故に主語を我れとする。